

必要性を説いている。長大の中島らは、骨結核の骨スキャンを初めて行い、多発性に陽性であった症例を示し、骨腫瘍の際の陽性スキャンとの鑑別について注意を喚起した。

# 10. 肺癌における肺血流シンチグラフィの臨床的検討

○坂田 博道 島袋 国定  
城野 和雄 中條 政敬  
篠原 慎治  
(鹿大・放)

39例の肺癌患者に対して  $^{99m}\text{Tc}$ -MAA による肺血流シンチグラフィを実施し、perfusion defect の範囲、左右肺血流比、放射線治療効果等につき検討した。

結果：1) 肺門部肺癌21例では全例著明な血流障害がみられ、肺血流分布の把握に優れており、肺葉以上の perfusion defect が19例 (90%) にみられた。

2) 肺野部肺癌では有用性は少ないが、転移リンパ節による perfusion defect の有無や治療効果の判定に有用であった。

3) 肺門部肺癌では放射線治療後、胸部 X 線像上改善がみられても、血流の改善がみられないものが19例中7例 (37%) にみられた。<sup>1)</sup>

4) 肺動脈造影所見上、狭窄7例中5例、絞扼4例、圧排1例、流入遅延3例では放射線治療後の肺血流の改善がみられたが、閉塞5例、収束1例、狭窄7例中2例では改善はみられなかった。

# 11. $^{67}\text{Ga}$ -citrate による肝外性発育型肝細胞癌の診断における有用性の検討

○村上 純滋 綾部 善治  
鴛海 良彦 仲山 親  
鴨井 逸馬 松浦 啓一  
(九大・放)

肝細胞癌の診断には、肝シンチグラフィや  $\alpha$ -fetoprotein の測定と共に、 $^{67}\text{Ga}$ -citrate による腫

瘍シンチグラフィが利用されている。

我々は、手術あるいは剖検により、肝外性腫瘍として発育していたことが確認され、また組織学的に診断された肝細胞癌5例について、 $^{67}\text{Ga}$ -citrate による腫瘍シンチグラフィの有用性について検討した。その結果、臨床的に肝細胞癌が疑われた場合、 $^{67}\text{Ga}$ -citrate による腫瘍シンチグラフィは必ず行なうべきであるという結論に達したことを、症例を呈示すると共に報告する。

# 12. $^{123}\text{I}$ 標識 $6\beta$ -Iodomethyl-19-norcholest-5 (10)-en-3 $\beta$ -ol ( $^{123}\text{I}$ -NCL-6-I) を用いた Adrenal scintigraphy の臨床的評価

○鴛海 良彦 鴨井 逸馬  
仲山 親 松浦 啓一  
(九大・放)  
前田 稔 小島 正治  
(同・薬学部)  
館野 之男 井戸 達男  
(放医研)

$^{127}\text{I}$  (P, 5n)  $^{123}\text{Xe} \rightarrow ^{123}\text{I}$  反応で得た高純度の  $^{123}\text{I}$  を用いて  $6\beta$ -Iodomethyl-19-norcholest-5(10)-en-3 $\beta$ -ol を標識した ( $^{123}\text{I}$ -NCL-6-I)。これを臨床例4例に使用して、全例に明瞭な副腎シンチグラムが得られた。

至適検査時間は  $^{123}\text{I}$ -NCL-6-I を静注後、48~72 時間であり、従来の  $^{131}\text{I}$  を用いての検査時間に比べ極めて短時間の検査が出来た。

被曝線量も  $^{131}\text{I}$  使用の場合に比べて著明に減少する。 $^{123}\text{I}$ -NCL-6-I は極めて優れた副腎シンチグラフィ用放射性医薬品と考える。

# 座長のまとめ (10~12)

木下 博史

10席では血流肺シンチで、左右肺活性比は病態を良く反映していると発表された。この比は電算機の付属していないシンチカメラでも、僅かな手間で求め得るものであり、再現性もよい。

11席：通常の肝シンチグラムだけでは、原発性